伝染性疾患

当院(ウチ)は年寄りの患者が妙に多い。彼らは例外なく気が短い。待合室からは、前の人をオシノケて入って来る。チェアに座ると、隣の人をキョーカツして「自分から診ろ」とセカす。毎回のように「今日で終りか！」とスゴむ。終われば、「早く会計をしろ！」と前の人をツキトバす。

こんな人ばかり続いたある日、伝染(ウツ)ってしまった。最初はCRの光重合にイライラする程度だった。セメントの硬化が待てず、まだペースト状なのにバリを取ろうとし、アルギン酸印象は硬化が待てずに撤去してしまい、やり直しをするハメになる。カルテを書こうとすると、最初の文字をトバして２文字目から書き出していた。

インレーの形成をしようと、麻酔をして削合を始めたら、「チョットイタイ」と言う。これをナダメて覆髄して、尚も「イタイ、イタイ」と言うのをさらにナダメナダメしながら形成し、印象を採ってはずした頃「先生、今痛くなくなってきたヨ」。

ウーム、やっと効いたかヤレヤレ、とカルテを書いたら『インレー装着』と書いていた。

光のどけき

日差しのおだやかな午後。根管治療をしていたら、患者さんの口が「カクッ」と閉じてしまった。どうやら、眠ってしまったらしい。声を掛けても反応がない。

指を咬まれちゃカナワン。バイトブロックを入れて治療を続ける。そのうちにイビキが聞こえ出した。大分に深く眠っているようだ。

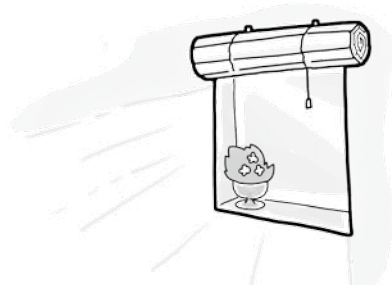
でも寝息も聞こえる。それも、同時に。エッ？　それって２人分？、見ると、ヨコに座っていた助手のユミ君まで眠っている。

マァ無理もないか、お昼ゴハンの後だし、室内はあたたかくて、BGMも心地良い。

でも私には使命がある。この狭くて曲がった根管を開通させなくちゃ。何とエライ歯医者さんなんだろう、私は。チョコチョコ、コキコキ、一生ケンメイ、一心不乱。

そのうち、誰かの声がした。私を呼んでいる。ウルサイナ。

「センセ～イ、次の患者さんが来てますョ～、起きてクダサ～イ」



嫌な予感

診療所には色々な電話セールスが掛かって来る。空気清浄機、ホームページ作成、先物取引、FX 投資。皆々アノ手コノ手で攻めて来る。

気の強い衛生士サンはケンカ腰でツッパネるのでサカウラミを買ってはノノシリ合うし、気のやさしいコは断われなくて、いつまでも話し込まれてしまう。結局、私が出て行くので断わり方が上手くなってきた。

「先生の大学の後輩のワタナベさんという方から電話です」。ゴルフの誘いかな？　と出てみると、ど～も声が違う。第一関西弁だ。

「経済学部卒業のワタナベと言います」

「そのワタナベ君が何の用かな？」

「マンションを買いませんか？」

「マンション？」

「京都のマンションですワ」

「京都？」

「大徳寺の前ですワ」

「大徳寺がどうした！」

「国宝ですがナ」

何だこの展開は？　ワケがワカンナイ。

「先生は腕が良くて、人柄が立派で、繁盛してるって評判ですヨ」

まるで本物のワタナベ君みたいな調子の良い事を言う。

「そう言ってくれるのはウレシイけどネェ君、ここは埼玉だゼ、京都のはイランよ」

「ダメですかァ…ハァ」とエラクがっかりしている。ヨシもう一息だ。

「そうとも、京都のマンションはイランなァ、せめて東京なら良かったのにネェ、サヨウナラ」

「エッ？　都内ならいいんですか？　実はわが社では東京の物件も扱っているんです。 今、近くまで来ているんでこれから伺いますウゥゥゥ」

段々小さくなる声を聞きながら思うのだった。ヤバイ、な～んか大きな失敗をヤラカシそうな気がするぞ。

ハードボイルド

『歯医者は強くなければ、やっていけない。やさしくなければ、やっていく資格がない』

どうせ世間からは、ラクしてモウケてんじゃないの？　と、思われているんでしょうが、どういたしまして、これがけっこう大変なんです。食べカスだらけ、歯糞だらけで、生姜焼き定食と餃子のニオイプンプンの口へ、息を止めて中をのぞきこむ。指をいれる。

ホッペやベロが、いきなり動いて機械で切りそうになって、寿命を縮める。なんとかカントカ苦労しながら治療を仕上げる。イタイとか長くかかったとかとイヤミを言われたら、ヘコヘコ謝る。

イヤハヤつらかったなあと、ほっとしているところへ、スタッフが有給休暇をとりたいと言ってくれば、ヘラヘラ許す。もう一度言いましょう。

『歯医者は強くなければ、やっていけない。やさしくなければ、やっていく資格がない』

ホラ吹き

ここだけの話なのだ。

また、あのホラ吹きめが、と思われるので、他所では内緒にしておいて欲しい。実は、私はウデが良い。良すぎるのだ。

麻酔を注射したのがわからなくて、「何もしてないうちに痺れてきたわ、ヘンよ、気持ち悪い」。

CR 充塡をすれば、痕跡が全く見えないので、「何かしたフリだけで金を取るなんて詐欺だ」と訴えられる。

根管充塡のレントゲン写真は額に入れて飾っておきたい位だ。

仮歯を作れば、患者さんはこれで完成だと思って、もう来なくなってしまう。だから肝心の「装着」にならなくて保険点数がもらえない。

困った、ウデは良いのに、貧乏になるばかりだ。

「ねえあなた、ウチにはもうお米がないのよ」。カミさんが米ビツを逆さにしてポンと叩いてみせる。「もっと解ってもらいましょうよう」

そうか、「解って」もらおう。だから、ウチの治療は痛くて、CR 充塡はでこぼこで、仮歯はジャガイモみたいな形をしている。

「お〜い、みんなあ、これはね、ワザとやってるんだからね」

御禁制

ご近所はガーデニングのモードになっていて、カミサンたちは連れだって園芸の専門店へ行っているらしい。フランスのアンドゥーズから輸入したという植木鉢が大量に買い込んである。肉厚で赤土色の上が大きく下が小さい、どうみても縄文式土器だ。
「あの赤い花は？」
「それはゼラニウム」
「じゃあ隣のは？」
「あれはね、シンビジウム」。なんだか放射線が出ていそうな名前ばかりだ。
「あのね、この先のアパートの植え込みにね、珍しいお花があったの。もうちょっとしたら、ひと株もらおって思ってたらね、ナントカっていう役所の人が来て根こそぎ持って行っちゃったの。ひどいわ」「きっと、ポピーだから芥子の一種だと思うわ。あれは」「今度どっかで見つけたら、すぐもらっちゃおっと」「育てて、増やして、みんなに自慢するんだもん。アタシ」
妻よ、もらうのは良い、育てるのも良い、増やすのも良かろう。しかし、内緒にしておいた方が良いかも知れないぞ、その植物は！

神秘の島

妻の生まれた島へは、ジェット何とかという高速船が就航している。船尾にはタービンエンジンが２基並び、側面にはBOEINGと誇らしげに描かれており、アイドリング音も迫力がある。シートベルト着用のサインが点灯し、「本船ただ今、海面より1.5m浮上し、時速80kmで航行中」とのアナウンス。今にもCAの機内サービスが始まりそうな雰囲気。
そうこうしていたら遠くのほうから「チャンカ、チャンカ、チャンカ、チャンカ」と三味線の音。「うるさいな、誰の携帯？　それにしても着メロが三味線かあ？　雰囲気が台無しだよ」。これがなかなか止まらない。「早く出なさいよ、もう！」そう思ったとたん、「ハアア――」と間の抜けた大声。ハレホレ、ガクッと腰砕けになったら、「サドゥウエ～エ」と追い打ち。あれ？　佐渡おけさ？　これってもしかして船内放送？
アアア、さっきまでの国際線やらCAやらのイメージが薄れていく。Mealはダメでもせめてお茶くらいは？　弾けて消えた。この落差に乗客はきっと大うけだろうな、と思って見回すと、皆さん平然と手荷物をまとめて下船の準備をしている。うちのカミサンは「ソーヨ、島が見えたら佐渡おけさ。常識ョ」。
ヤレヤレ、とにかく昼食は自慢の海の幸をと、店に入ると店員は迎え入れもせず、呼び止めても逃げてしまう。席は空いているのに通さない。やっと座れて注文を取ったら目を伏せたまま逃げて行く。「だってえ、島の人は知らない人と話すの苦手だモン」と妻。
サテ、夕食は有名な佐渡牛でしゃぶしゃぶ。シメは美味しい佐